



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

## 形態的に対立する自動詞と他動詞の位置関係

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 由紀子, 後藤, 規子, 六郷, 明美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/3339">http://hdl.handle.net/20.500.12099/3339</a>

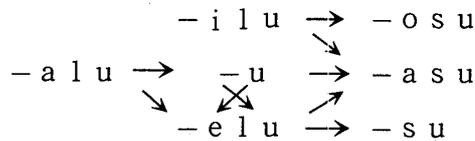
# 形態的に対立する自動詞と他動詞の位置関係

加藤 由紀子・後藤 規子・六郷 明美

## 0. はじめに

第二言語として日本語を学習するうえで、難しい文法事項はいくつかある。特に母語にその概念がなかったり、体系的に学んでいなかったりする場合には、まずその概念や体系を理解するところから始めなくてはならず、かなりの練習と試行錯誤を必要とするのが常である。そのような文法事項のひとつ、自動詞・他動詞はよく取り上げられ、研究も多くされてきた。にもかかわらず、かなり上級レベルの学習者でさえ、頻繁に間違えることも否定できない事実である。

本稿では、自動詞・他動詞の中でも、学習者が一番混乱しやすい、相対的な対立をみる自動詞と他動詞を観察の対象にした。対立する動詞には、全体から見て、その対応の仕方にいくつかの基本的なパターンが見られ、その主要なパターンが分かれば、比較的容易に対となる動詞が予想されるところと考えられる。この考えに基づいて、下記の佐久間鼎 (1983 P.137) による自・他動詞の相関関係の体系を基準として、実際の場合に必要な動詞の形を簡単に見つけ出す鍵となるチャートはどのようなものであり得るかについて考察した。



注：佐久間は日本語のラ行子音を“l”で表記している。

## 1. 日本語教育の現場における自動詞と他動詞の問題点

### 1.1 日本語教師にとっての自動詞・他動詞

自動詞・他動詞という言葉は、日本語教師にはあまりにも日常的な術語であり、概念である。それゆえ、自動詞と他動詞の分類に疑問を持つこともなく教えていることもあれば、その分類に疑問を抱いても、そのまま教えているということもあるのではないと思われる。しかしながら、現在の辞書にある動詞の分類に至るまでには、自動詞・他動詞という分類を否定する学説も含め、さまざまな観察、研究、学説があったことを理解して、さらに現在の研究にも目を向けるべきであろう。

さて、自動詞と他動詞の問題というと、学習者が理解や習得に難しさを示したり、誤用を繰り返したりすることが多いことから、ともすると、学習者が最も難しいとする語彙的対立がある自・他動詞のみに注目する傾向がある。しかし森田良行 (1990) が言うように、実際には対をなすものより、いずれか一方しかないもののほうが多い。表1に4種の日本語の教科書に出てくる動詞を分析した結果を示すが、この表も森田の指摘を裏付ける結果となった。

表1 4文献における動詞の種類とその比率

	動詞数	する動詞	対を なすもの	対を なさないもの	両用動詞
外国人のための日本語 シリーズ 3 動詞	646	66 (10.2%)	199 (30.8%)	376 (58.2%)	5 (0.8%)
文化初級日本語 I・II	406	102 (25.1%)	108 (26.6%)	194 (47.8%)	2 (0.5%)
新日本語の基礎 I・II	300	49 (16.3%)	93 (31.0%)	156 (52.0%)	2 (0.7%)
日本語基本動詞用法辞典	845	168 (20.0%)	297 (35.1%)	342 (40.5%)	38 (4.5%)

注) 同じ動詞でふたつの項目に分類されるものは、その各々の項目で数えたが、動詞数では一度しか数えていないので、全体が100%を越えることがある。

例: 「対をなすもの」として、『終わる - 終わる』があるが、『終わる』は同時に両用動詞にもなる。

このような事実に目を向けず、対をなす自動詞と他動詞の指導に終始する傾向が、かえって学習者の理解を妨げているのではないだろうか。つまり、意味が明解で、対をなさない既習の自動詞あるいは他動詞を示すことこそ、その概念の違いを学習者に示す絶好の機会となると考える。

## 1.2 自動詞・他動詞習得の難しさ

自動詞と他動詞の習得の難しさには、いくつかの原因が考えられる。まず、動詞の形や、助詞を含む構文を学習する以前に、学習者にその概念が認識されていなければならないことである。その概念とは、『日本語百科大事典』(1988 P. 196)を引用すれば、「他動詞は、その表す動作が他に及ぶ動詞であり、自動詞はそうでない動詞である」ということである。これを確実にしかも容易に学習者に認識させられる方法は、1.1の終わりで述べたが、既習の動詞の中で対をなさない自・他動詞を提示することである。こうしておけば、対立しない自・他動詞については敢えて区別する方法を論じなくても、学習者自身で見つけ出せるようになると思われる。また、ここで理解した自・他動詞の違いに関する概念が、後で問題となってくる対立する自・他動詞の違いを考える時にも大切な要素となるのである。

さて、では問題となる対立する自・他動詞についてはどうだろう。ここでの理解の困難の度合いは、個人的な言語学的認識の差異よりも、母語の構造に負うところが多いと言えそうだ。つまり学習者の母語が、どのような語形で自動詞・他動詞を持っているかということである。1.1で、日本語の動詞全体から見ると、対をなす動詞は、対をなさないものに比べてそれほど多くないと書いた。しかし、寺村秀夫(1982)も述べているように、ひとつの形が自動詞にも他動詞にも使える動詞が多い英語、中国語に比べると、その数は非常に多いと言える。これは、英語や中国語を母語とする学習者の自・他動詞の違いを認識することの難しさにつながっているのである。

また、語彙の形態からすると、共通した語根を持つ対をなす自動詞と他動詞の場合には、二者の間にある種の意義的な同一性があり、それに加えて形がよく似ていることが、混乱を招く原因となっ

ている。

さて、次の段階として、上記のような動詞の形だけのレベルでは、さほど問題がなかった学習者でも、いざ文を作るとなると、助詞との関わりも含めて、さまざまな誤用をするようになる。例えば、自動詞はヲ格をとらず、他動詞はヲ格をとる、とだけ覚えていた学生が、自動詞でヲ格をとる「(道を) 歩く」のような動詞の分類を間違えたことによって誤用文を作るという初歩的なものから、いくつかの要素が組合わさった複雑なものまである。森田良行 (1985) が挙げているものに次のようなものがある。

〔例〕 自転車を上手に乗る人

この例を見て、まず気づくのは、「乗る」は自動詞であるからヲ格は取らず、ニ格にするべきだということである。しかし、「自転車を上手に乗る人」に変えたらそれで正しいかと言うと、森田が指摘するように、それではただ自転車を上手に「乗っかる」、あるいは「跨がる」ことにしかならない。この不自然さを解消するとしたら、テイルという補助動詞を補って「自転車を上手に乗っている人」にするか、「乗りこなす」という複合語を使用しなければならなくなると言っている。しかし「乗りこなす」を使うとすると、自転車の後にニではなくヲが付かなければならなくなる。この一例を見ただけでも、複数の原因が複雑に絡み合っているのが分かる。

学習者の誤用文を見ると、森田以外にも寺村秀夫 (1982)、井上和子 (1993) をはじめ多くの研究者がすでに指摘しているように、自動詞・他動詞は、基本的には語彙のレベルの問題でありながら、それが単に語彙の問題だけで終わらず、意味的にも構文的にも、ヴォイスとの関係は無視できないということが分かる。この問題は、たとえ語彙レベルのことを考える時でも、単なる語論や形態論にとどまるのではなく、構文論も考慮しなければならないということを示唆しているのである。

## 2. 自動詞・他動詞の分類とヴォイス

ここで、自・他動詞の語形を論ずる前に、自・他動詞にはどのような分類があり、それらがどのように関係し合っているのかについてまとめ、誤用との関連について考察する。

### 2.1 自動詞と他動詞の分類

寺村秀夫 (1982) は、自動詞と他動詞を次のように分類した。まず形態的対立を見ない自動詞を「絶対自動詞」、同じくそのような他動詞を「絶対他動詞」、形態的対立の中で存在しているものを「相対自動詞」「相対他動詞」、さらに、自動詞としても他動詞としても使えるものを「両用動詞」に分類している。寺村が挙げた例は次のようなものである。

絶対自動詞	死ぬ	泣く	歩く	走る	飛ぶ
相対自／他動詞	壊れる－壊す	開く－開ける	閉まる－閉める		
絶対他動詞	殺す	食べる	書く	飲む	買う
両用動詞	開く <sup>ひら</sup>	閉じる <sup>と</sup>			

用語は研究者によって違うが、意味的には同様なので、以下では寺村の用語を使用する。

### 2.2 動詞とヴォイス

#### 2.2.1 絶対自動詞・絶対他動詞とヴォイス

これらの動詞は、対をなす動詞を持たないため、必要となると、使役形を用いて自動詞を他動詞

化したり、受身形を用いて他動詞を自動詞化したりして、それを補っている。寺村が挙げた動詞を例にとって、その形を作ってみると、次のようになる。

- ・使役形を用いて絶対自動詞を他動詞化する場合

死ぬ－死なせる 泣く－泣かせる 歩く－歩かせる 走る－走らせる

- ・受身形を用いて絶対他動詞を自動詞化する場合

殺す－殺される 食べる－食べられる 書く－書かれる 買う－買われる

### 2.2.2 相対自動詞・相対他動詞とヴォイス

2.2で対をなさない動詞は、それを補うために、使役形と受身形を使うと書いた。では、それを補う必要のない対をもつ動詞は、使役形や受身形と結びつかないかと言うと、実はそうではない。すべての動詞に成立するわけではないが、次のような例が挙げられる。

- (1)a テーマが 決まる。 (自動詞)  
 b テーマが 決められる。 (他動詞+受身文)  
 (2)a 先生が 生徒を 集める。 (他動詞)  
 b 先生が 生徒を 集まらせる。 (自動詞+使役文)

この例を見ると分かるように、(1)は「決まる - 決める」、(2)は「集まる - 集める」という対立する動詞があるにもかかわらず、それぞれbの文も作る事ができる。そして、aとbの間には意味の上で違いがあることが分かる。理論的には2.2.1からも予想されるように、aとbの意味が同じになってよいところが、微妙に違うのである。それぞれaの文だけで簡単にすませばよいところを、敢えて受身や使役の文にするという複雑な操作をする背景には、その対立する動詞では表現しきれない意味を表そうとする姿勢が見られる。

### 2.2.3 両用動詞とヴォイス

両用動詞は動詞としての形態は同じであるが、自動詞として機能している文にはヲ格の補語がなく、他動詞として機能している文にはそれが現れるという構文形態をとる。それを受身文にしたり、使役文にしたりした場合には、形が同じなので、形態からだけでは、それが自動詞からの変形なのか、他動詞からの変形なのかは分からない。

[例]	【自動詞文】	戸が 開く	【他動詞文】	戸を 開く
	【受身文】	戸が 開かれる	【使役文】	戸を 開かせる

### 2.3 それぞれの動詞の分類と誤用文ができる頻度

絶対自動詞と絶対他動詞を使用する時にできる誤用文の数は、割合に少ない。それはその概念的なとらえ方が比較的容易であることと、似た語形を持たないことによると考えられる。そしてたとえ間違っただとしても、それは単なる思い違いや、覚え違いによるものがその大半を占める。この場合は誤用の原因が単純なので、それを直すのもそれほど困難ではない。

両用動詞は形が同じなので、たとえ間違っただとしても動詞の形自体には違いはなく、助詞だけが違って来る可能性があると考えられる。それに加え、動詞数がそれほど多くないので、それだけ覚えてもそれほど負担にはならない。

誤用がどうしても多く出てくるのは、相対自動詞と相対他動詞のところなのである。ここでの誤

用を軽減させるてだてが見つければ、難しいと言われる自・他動詞の問題も少なくなると考えられる。

### 3. 形態的に対立する自動詞・他動詞

#### 3.1 形態的に対立する自動詞と他動詞の考察内容

形態的に対立する自動詞と他動詞は、共通した語根を持っていると考えられる、ということには1.2で少し触れた。この形態的特徴こそが、4章で紹介する研究者をはじめ、自・他動詞を扱っているほとんどの研究者が、派生と結び付けて考えているゆえんである。さて、この派生という現象がおこる時、どちらがもとになっているかについては、動詞によって異なる。本稿では、そういった派生の方向も考慮に入れつつ、自動詞・他動詞の形態的な相関関係を見ていくことにする。そして、それらを基に、語幹から、求める自動詞あるいは他動詞を見つけ出す方法、あるいは自動詞からそれに対応する他動詞、同様に他動詞から自動詞を見つけ出す方法について考察していく。

#### 3.2 自動詞と他動詞の相関関係の分類

ここでは、いくつかの研究者の分類を比較する中で、学習者にとって最も分かりやすく、覚えやすい形式を考えていく。それぞれを比較しやすくするために、以下のような方法で整理し直したので、元の学説の表記と異なる場合がある。左側に自動詞、右側に他動詞を示し、ローマ字表記を用い、その間に漢字で語義を示す。ローマ字表記については、動詞の活用を考えるのに便利な日本式の綴り方をする。なお、実際の動詞の例はその研究者がその項の筆頭に記載しているものを、基本的には採用した。

##### 3.2.1. 西尾寅彌 (1954) の分類

1	-ERU	----	-U	nuk-eru	--(抜)--	nuk-u
2	-U	----	-ERU	tuk-u	--(附)--	tuk-eru
3	-ARU	----	-U	husag-aru	--(塞)--	husag-u
4	-ARU	----	-ERU	kak-aru	--(掛)--	kak-eru
5	-U	----	-ASU	odorok-u	--(驚)--	odorok-asu
5'	-U	----	-ASERU	a-u	--(合)--	aw-aseru
6	-RU	----	-SU	sato-ru	--(悟)--	sato-su
6'	-RU	----	-SERU	no-ru	--(乗)--	no-seru
7	-ERU	----	-ASU	huk-eru	--(更)--	huk-asu
7'	-ERU	----	-YASU	tui-eru	--(費)--	tui-yasu
8	-RERU	----	-SU	arawa-reru	--(現)--	arawa-su

この分類で疑問に思うのは、西尾はこの分類を考えるにあたって、佐久間鼎 (1936) と望月世教 (1944) の分類をかなり研究したと表明しているにもかかわらず、佐久間の分類に見られる、(-IRU -- -ASU) と (IRU -- -OSU) の項目が見当たらないことである。それについての説明は何もなされていない。しかし、前者の項目には「生きる-生かす」など、後者の項目には「起きる-起こす」などの基本的な動詞が入っていることを考えると、この項目は外せないと考えられる。

## 3.2.2 寺村秀夫 (1982) の分類

1	-ARU	----	-U	husag-aru	--(塞)--	husag-u
2	-ARU	----	-ERU	at-aru	--(当)--	at-eru
3	-U	----	-ERU	ak-u	--(開)--	ak-eru
4	-RU	----	-SU	mawa-ru	--(回)--	mawa-su
5	-RERU	----	-SU	tao-reru	--(倒)--	tao-su
6	-ERU	----	-ASU	sam-eru	--(冷)--	sam-asu
7	-IRU	----	-ASU	ik-iru	--(生)--	ik-asu
8	-IRU	----	-OSU	ot-iru	--(落)--	ot-osu
9	-RU	----	-SERU	ni-ru	--(似)--	ni-seru
10	-U	----	-ASU	tob-u	--(飛)--	tob-asu

上の項目9の一番目には、「見る」は通常では他動詞であるとしながらも、「見る－見せる」が示されているのであるが、それでは紛らわしいので、他の例として寺村が挙げている「似る－似せる」を採った。項目を比べると、西尾が取り上げておらず疑問に思った(-IRU -- -ASU) (-IRU -- -OSU) はそれぞれ7と8に入れられている。しかし、西尾にはあった次の3つの項目が寺村の分類にはない。(カッコ内は西尾分類の番号)

① (7')	-ERU	----	-YASU	mo-eru	--(燃)--	mo-yasu
② (5')	-U	----	-ASERU	a-u	--(合)--	a-waseru
③ (1)	-ERU	----	-U	nuk-eru	--(抜)--	nuk-u

上記の項目の①を寺村が敢えて別の項目に分類しなかったのは、五十音図から理論的に仮設された子音音素を考えて、「燃える moe-ru」の“e”をヤ行の“ye”と見なしているからだを推測する。つまり“moy-eru -- moy-asu”と考えており、6の項目に入れていられる。同じく②も、「合う a-u」の“u”をワ行の“wu”と見なして、“aw-u -- aw-asu”と考え、10の項目に入れていられる。この②の考えは村木新次郎(1991)も取り入れているところである。この①および②の基本にある五十音図の子音音素の理論は、動詞の活用を考える上で非常に有用であると思われる。ただし③の項目にはかなりの基本的な動詞が入っており、西尾の分類でも筆頭に出されている項目であることを考えると、この項目なしの分類は不完全なものであると言わざるを得ない。明らかにこの欠落は寺村の見落としであると考えられる。

## 3.2.3 村木新次郎 (1991) の分類

村木の分類は非常に細かく、[自－他]の対応で形の異なるもの38項目、同形のもの2項目に分けられ、[自－自]の対応で9項目、[他－他]の対応で12項目に分けられている。当然のことながら寺村の分類の項目すべてが網羅されている。しかし、この分類は、今までの主要な項目にまとめていこうとする分類とは逆方向で、さらに細かく分析していこうという方向性を持っている。これは私どもが目指す方向とは異なるので、その分類を具体的に示すことをしない。つまり、あまりにも細かく分類されているために、自動詞と他動詞の形態的な相関関係を全体的に見ようとするにはむずかしいと考えるからだ。ただし、この分類が他の分類と異なり優れていると考えられる点は、一対とは限らない自・他動詞の対応、あるいは自動詞と自動詞、他動詞と他動詞の対応が、はっきり見られることである。

- [例] ・複数の [自-他] の対応……紛れる - 紛らせる / 紛らす / 紛らかす / 紛らわす  
 ・ [自-自] の対応 ……休む - 休まる 浮く - 浮かぶ  
 ・ [他-他] の対応 ……聞く - 聞かす 見る - 見せる

言語の変化によって、対を失ってしまった動詞もある代わりに、ここで見られるように複雑な対応をみることになった動詞もあることに気づかされる。このことは形態的に対立する動詞という、自動詞ひとつに対して他動詞ひとつという一対だけを考えてしまいがちな傾向が、明らかな誤解であることを教えてくれる。

### 3.2.4 『日本語基本文法辞典』(1989) の APPENDIX

寺村の分類項目 1 と 7 に当たる分類が見えず、次の 3 つが加わり、つごう 11 に分けられている。

- |   |       |      |       |         |     |      |          |     |
|---|-------|------|-------|---------|-----|------|----------|-----|
| ① | -WARU | ---- | -ERU  | ka-waru | 変わる | ---- | ka-eru   | 変える |
| ② | -ERU  | ---- | -YASU | hi-eru  | 冷える | ---- | -hi-yasu | 冷やす |
| ③ | -ERU  | ---- | -U    | yak-eru | 焼ける | ---- | yak-u    | 焼く  |

ただし、①は寺村の分類の項目 2 の ARU-ERU の箇所に、②は同じく 6 の ERU-ASU の箇所に、そのやや変形した同種のものとして分類されている。これは寺村分類のところでも述べたように、ヤ行のエを “ye” と見、ワ行のウを “wu” と見る五十音図の子音音素の理論に基づくものと言えよう。また、1～10 の項目に入らないものは、すべて「その他」として扱っている。確かに 1 と 7 に入ってくる動詞には、基本的な動詞が少ないので、初級または中級の学習者がそれらを「その他」として覚えても支障はないと考えることもできよう。

## 4. 動詞の派生について

### 4.1 基本的な派生の仕方

3.1 で、共通する語根を持った自動詞と他動詞は、どちらかが語基となって派生しているということについて触れた。しかし、どちらかと言えない場合もある。

まず、どちらかがもとになっているものには、ふたつの種類がある。それは、井上和子 (1976) が、「他動化変形」「自動化変形」と呼び、奥津敬一郎 (1967a) が「他動化」「自動化」と呼んでいるものである。用語は異なるが、それぞれ、自動詞がもとになって他動詞ができたと考えられるものと、他動詞がもとになって自動詞ができたと考えられるものを表している。

もうひとつは、どちらかがもとになってできているものではないもので、井上は「両極化変形」、奥津は「両極化」と呼んでいる。「両極化」という言葉が示す範囲は研究者のとらえ方によって異なるが、ここでは井上の定義に従って、共通の語幹からそれぞれ自動詞、他動詞に分かれていったと考えられるもの、ということにする。

### 4.2 派生法の分類

奥津敬一郎 (1967a)、鈴木重幸 (1972)、井上和子 (1976) の 3 つの学説について比較する。なお、表記の方法はそれぞれ異なるので、後に示す佐久間鼎の体系図との関係で、語末の形を表記する。

このリストから分かるように、派生の方向で 3 人に共通するのは、次の点である。

	自動詞→他動詞	自動詞←他動詞	自動詞↔他動詞
奥津	(他動化辞 as/kas/os/se/s) U → ASU (乾) RU → KASU (寝) U → OS (及) IERU → ESU (消) RU → SERU (似) IRU → ASU (生)	(自動化辞 ar/are/sar/or/ur) ARU ← U (挟) ARU ← ERU (上) ARERU ← ERU (分)	(他動化辞 r 自動化辞 s) RU ↔ SU (治) RU ↔ SERU(乗) RERU ↔ SU (流)
井上	(他動詞化形式素 as/os/se) U → ASU (滅) U → OSU (滅) ERU → ASU (枯) U → ERU (傾)	(自動詞化形式素 ar/e) ARU ← ERU (上) ERU ← U (碎) ARU ← U (刺)	(他動詞化形式素 r/re 自動詞化形式素 s/se) RU ↔ SU (余) RERU ↔ SU (離)
鈴木	U → ERU (付) U → ASU (驚) ERU → ASU (逃)	ERU ← U (抜) ARU ← U (塞) ARU ← ERU (掛)	RU ↔ SU (残) RERU ↔ SU (表)

- 自動詞→他動詞      U → ASU
- 自動詞←他動詞      ARU ← U      ARU ← ERU
- 自動詞↔他動詞      RU ↔ SU      RERU ↔ SU

わずかこの5点しか共通しないのは、その分野の特徴を顕著に表している基本形態に対する考えの違いからくるものであると言えよう。

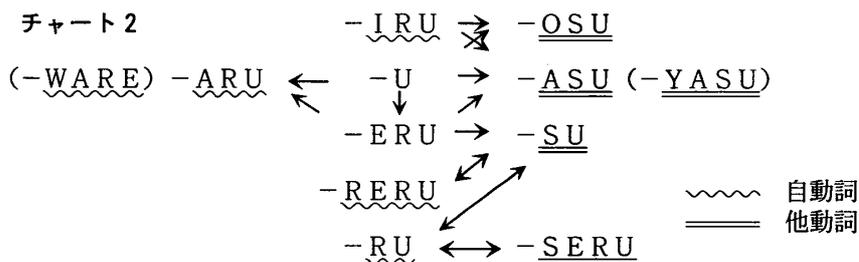
## 5. 使いやすい自動詞・他動詞の分類およびチャートとは

### 5.1 分類はどうあるべきか

意味的な対立(例えば、「生まれる - 死ぬ」)ではなく形態的な対立に目を向けて、いくつかの分類を挙げてみたが、この他にもさまざまな見方があり、分類がある。ここでは言語学的な優劣に言及するつもりはない。なぜなら、本稿での目的は、第二言語としての日本語学習者に、分かりやすいチャートを提供することだからである。大まかすぎるとは、例外が多くなるし、細かすぎるとは覚えにくくなってしまう。3.4で取り上げた『日本語基本文法辞典』は、多くの学習者の支持があることを見ても、基本的にはよい分類だと考えているが、寺村の項目1と7は、語構成から見て、捨てがたい点がある。そこで、このふたつを一体化したものを以下に示す。

1	-ARU	----	-U	husag-aru	--(塞)--	husag-u
2	-ARU	----	-ERU	at-aru	--(当)--	at-eru
2'	-WARU	----	-ERU	ka-waru	--(変)--	ka-eru
3	-U	----	-ERU	ak-u	--(開)--	ak-eru
4	-U	----	-ASU	tob-u	--(飛)--	tob-asu
5	-RU	----	-SU	mawa-ru	--(回)--	mawa-su
6	-RU	----	-SERU	ni-ru	--(似)--	ni-seru





## 6. まとめ

5.2及び5.3で作成したチャートに現れる形態上の特色は、佐久間鼎ら、本稿で取り上げた研究者以外の学説にも通じることである。つまり、チャートの作成意図は、これらの諸学説の基本点を容易に理解させ、学習者自身に動詞を見つけ出させることにある。もちろん、このように何か簡単なチャートや早見表さえあれば、それで言語が容易に習得できるというわけではない。最終的にはどのような言語も、学習者自身がひとつひとつの言葉や、構文を覚えなければならないし、それが使えるように練習を繰り返さなければならないことは確かである。しかしそれと同時に、可能な限り容易に、効率よく、確実に覚えられたらと思うのもまた、学習者の自然な感情であろう。

もちろん、ここで取り上げた研究者の学説はほんの一部でしかなく、この他にも多くの研究がなされている。しかし多くの日本語学習者は、これらの優れた研究成果の恩恵に直接あずかれるということはないのである。なぜなら、自分で論文を読み、それが理解できるという学生はごく稀なのだから。だとすれば、その優れた論文の内容を、その一部でも学生に分かる形で紹介し、授業に活用し、学習者の理解の助けになるようにすることは、わたしたち日本語教師にとって極めて重要なことである。もっとも、単純化しようとするあまり、それらを学生に役に立つ形で、分かりやすく紹介しようとする際に、原著ではもっと丁寧で緻密な分析や内容が、本来の論旨から逸脱してしまう危険性もかなりある。実用性と言語学的な学説との間のどこに身を置いて日本語の指導をしていくかは、個々の教師によって異なるとはいえ、その危険性については、教師自身がたえず認識していなければならない。

また、今回は自動詞・他動詞をその形態のみから考察した。全体像をさらに詳しく見ていくためには、意味の面、あるいは構文の面から考えていかなければならないと考える。

謝辞：私たちが定期的に続けている研究会の指導者である成城大学文芸学部教授工藤力男先生には、本稿を書くにあたって多くの助言を受けた。ここに感謝の意を表したい。

## 参考文献

井上和子 (1993) 『変形文法と日本語 (下)』 大修館書店

岡本きはみ、岩岡登代子 (1987) 『外国人のための日本語シリーズ 3 動詞』 荒竹出版

奥津敬一郎 (1967a) 「自動化・他動化および両極化転形——自・他動詞の対応——」『国語学』70  
国語学会

佐久間鼎 (1983) 『現代日本語の表現と語法』復刊 くろしお出版

須賀一好・早津恵美子編 (1995) 日本語研究資料集 [第1期第8巻] 『動詞の自他』  
ひつじ書房

- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房  
鈴木丹士郎 (1972) 「動詞の問題点」『日本文法講座 動詞』 明治書院  
寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタックスと意味 I』 くろしお出版  
西尾寅彌 (1954) 「動詞の派生について――自他对立の型による――」『国語学』17 国語学会  
村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房  
森田良行 (1985) 『誤用文の分析と研究』 明治書院  
(1990) 『日本語学と日本語教育』 凡人社  
(1994) 『動詞の意味論的文法研究』 明治書院  
『新日本語の基礎 I・II』 (1990・1993) 海外技術者研修協会編 スリーエーネットワーク  
『日本語基本動詞用法辞典』 (1989) 小泉保他編 大修館書店  
『日本語基本文法辞典』 (1989) 牧野成一, 筒井通雄著 ジャパンタイムズ  
『文化初級日本語 I・II』 (1987) 文化外国語専門学校編 文化外国語専門学校  
『日本語百科大事典』 (1988) 金田一春彦, 林大, 柴田武編集 大修館書店